

中途障害者の生活期で「回復につながる主体性」の段階評価は、 障害をみている現場にとっていかに役立つのか

主発表者：和田真一

連名発表者：吉野順也

所属先：森山リハビリテーションクリニック

WSの目的：脳損傷による中途障害者の生活期で「回復につながる主体性」の段階評価は、障害をみている現場にとっていかに役立つのかを考える

WSのゴール：主体性の段階評価の有用性・可能性と問題点が整理できる。

脳卒中や頭部外傷により身体障害が残存した場合、病院から在宅に帰ったあとの生活期では、機能回復に限界がある。生活期では「専門職主導」のリハビリテーションのままでは良くなることなく多く経験されており、目標が明確でない機能訓練中心の漫然としたリハビリテーションは問題視されている。一方、発症から数年経っていても、楽しみや役割ができた体験などから少しずつ自信を取り戻して主体的な姿勢へ転換したことにより、自分の生活を自分らしくマネジメントして活動的に生活している中途障害者を経験することがある。障害のある人が「主体的に」、その時点の身体能力を最大限生かして生活の幅を拓げ、自分らしい生活を構築することが重要だと考えられる。WSでは、まず、脳損傷による中途障害者の長期的な改善につながる主体性の回復プロセスなどの、これまでの研究の紹介を行う(The long-term process of recovering self-leadership in patients with disabilities due to acquired brain injury. Jpn J Compr Rehabil Sci 10: 29-36, 2019. など)。生活期の回復に主体性が大切だと感じている現場の支援者は多いと考えている。大切であると分かっているにもかかわらず、これまでは共通の指標が無かった。障害者の「主体性」の段階をおおまかに評価し、その特徴を捉え、周囲の人で共有でき得ることは、生活の回復へ向けた、一貫した対応につながると思われる。このことが障害をみている現場にとってどのように役立つのかを模索したい。参加者の方々にもこれまでご自身が関わった主体性について考えさせられた中途障害者の事例について小グループで話し合ってもらいたい。主体性の回復段階の評価法については発表者たちも手探りであり、現段階で発表者たちが考えている「主体性の評価方法」についても触れて、共有したい。